

〔研究ノート〕

大学生の依存と相談の心理

吉 川 茂

I 目的

一般に学業の最終段階にある大学生は、社会での自立に向けて依存からの脱却が必要とされる時期でもある。それでは大学生は悩みや問題の解決のために誰かに相談することについてどのように感じ考えているのであろうか。他者に相談することは依存であるとして回避しようとするのか、あるいは相談することにさほど抵抗を感じていないのか、大学生の依存性と相談との関係を解明することを目的とする。

まず、依存について定義的な概略を眺めておきたい。依存とは「他者からの援助を直感的に期待したり、情緒的、金銭的支援や保護、安全、日常の世話を他者に積極的に求めている状態」(繁樹, 2013)である。また精神科学の領域では、依存は「主体が他者に左右される、あるいは他者の行動なしでは、その個体が生きていけないような状態、あるいは他者の行動によって、その個体の行動が決定する状態のことをいう」(加藤他, 2011)とされる。さらに、「他者に頼ることで自己の欲求を満たそうとする傾向。金銭や労働力等、他者のもつ資源に基づいて目的を達成しようとする道具的依存と、他者と共にいることや励まし、慰めなどにより安心感を得ようとする情緒的依存に大別される」(下山, 2014)と、依存性の内容を分類した記述もみられる。「依存」と類似した概念である「甘え」との区別についてはつぎのような記載がみられる。「『甘え』についての固有文化心理学研究では、『甘え』が『依存』とは区別できることが主張されている。コントロールの視点から考えると、甘えている者は、甘えを受け容れてくれる者をコントロールしてしまうのに対し、他者に依存して

いる者は依存対象の他者のコントロールの下に置かれることになるのである」(日本社会心理学会, 2009)として両者の違いをとらえている。

つぎに比較的近年の相談行動についての研究を概観すると、中学生を対象とした研究が目につく。永井・新井(2007)は、中学生の友人への相談行動に関与する要因を調べた結果、つぎの結果を得ている。「(a)相談行動の高さには、相談実行の利益、問題の程度の高さが影響していた。(b)相談実行のコストは相談行動と関連していなかった。さらに、(c)心理・社会的問題の相談行動の高さには、相談回避のコストの高さが影響していた。(d)心理・社会的問題の相談行動の低さには、相談回避の利益の高さが影響していた。」ここでの「利益」とは相談行動を実行・回避した場合に予期されるポジティブな結果であり、「コスト」とはネガティブな結果のことを示している。この利益・コストという視点から加茂田・秋光(2012)は、中学生が教師に対して相談する際の生徒の期待と教師の予測との比較を行っている。五十嵐・大野・小澤(2013)は中学生が相談相手としての担任と養護教諭に対して利益・コストのちがいを検証している。武田・石田(2013)は、青年期の親子関係に焦点を当てて相談行動の利益・コスト尺度の作成を試みている。女性のほうが母親に相談しやすいこと、親との信頼関係がポジティブな結果の予期につながりやすいことなどが示された。

以上の研究は中学生を主たる対象としつつ相談行動のさまざまな側面を取り扱っている。大学生を対象としたときには、大学内の相談機関である学生相談室への認知と行動が主たる問題として扱われるケースが多い。したがってカウンセリングに携わる著者による研究がほとんど

である。西河・鈴木(1994)は、学生相談室の利用希望の有無と相談室のイメージとの関連を扱っている。櫻井・有田(1994)は、学生相談センター、カウンセラー、カウンセリングの3つの概念をSD法により男女比較している。荻原・吉川・山田(1995)は、学生相談のイメージと相談活動内容や相談室の名称などについて学生の意見をまとめている。森田(1997)は、学生相談室のイメージを、接近群・敬遠群・消極群・保留群の4群に分類して来談との関係を調べている。伊藤(2006)は、学生相談機関のイメージについて因子分析の結果から4つの因子を見出している。

大学生において依存性の高低が、他者に相談することについての考えや、相談すべき大学施設である学生相談室のイメージとどのように関連するか調べたい。

II 方法

実験参加者は大阪府下の4年制大学の1,2年生55名(男子22名,女子33名)である。回答に不備のあった者および留学生の6名は分析の対象から除いてある。

調査のための質問紙はつぎの3種類を使用した。講義時間中に配布し回収した。

(1) 大学生の依存性を測定するために、対人依存欲求尺度を用いた。竹澤・小玉(2004)によって作成され、依存欲求を「是認, 支持, 助力, 保証などの源泉として他人を利用しないし頼りにしたいという欲求」と定義している。依存を消極否定的なものとするよりも適応的な側面を考慮して作成されている。対人依存欲求には、情緒的依存欲求と道具的依存欲求の2つが存在するとの前提に立っている。それぞれ10項目ずつから構成され、選択肢は「1. 全くそう思わない」「2. めったにそう思わない」「3. まれにそう思う」「4. ときどきそう思う」「5. しばしばそう思う」「6. いつもそう思う」という6ポイント・スケールである。高得点であるほど高い依存欲求を表す。

(2) 相談することは他者への援助要請の一つであるが、相談すると自己にどのようなメリット・デメリットが生じると予想するかを測定するための、永井・新井(2008)による相談行動の利益・コスト尺度改訂版を用いた。相談つまり援助要請を行えば自分自身のどのような利益あるいは不利益(コスト)につながるかという結果の予想をみるものである。因子分析の結果、6つの因子が抽出されている。友だちに悩みを相談した場合に予想される友だちの対応や自己の心境を測定する26項目で構成され、選択肢は「1. そう思わない」から「5. そう思う」までの5ポイント・スケールとなっている。高得点ほどそれぞれの因子の傾向が強いことを示す。

(3) 大学生にとって学内での主要な依存先と考えられる学生相談室をどのように見ているかを調べるために、伊藤(2006)によって作成された学生相談機関イメージ尺度を実施した。大学の学生相談機関をどのようなどころだと思いかを尋ねる36項目より成り、選択肢は「1. 全くそう思わない」から「5. 非常にそう思う」の5ポイント・スケールである。学生の来談行動の決定因を認知の視点から検討する目的で作成されている。

III 結果および考察

対人依存欲求尺度を構成する2つの下位尺度である情緒的依存欲求と道具的依存欲求のスコア間の相関は、男子で $r=.535$ ($p<.02$)、女子で $r=.765$ ($p<.01$)と有意な関連がみられた。特に女子においては、情緒的および道具的依存欲求の関連性は強く依存欲求として一体的な傾向がみられた。

表1には、対人依存欲求尺度、相談行動の利益・コスト尺度改訂版尺度、学生相談機関イメージ尺度における各下位尺度の平均と標準偏差を男女別に示す。

対人依存欲求尺度の2つの下位尺度である情緒的依存欲求と道具的依存欲求のスコアを男

女間で比較すると、いずれも女子のスコアのほうが高い結果であったが、有意差は認められなかった。(情緒的依存欲求: $\chi^2=2.056$ $df=1$ n.s. 道具的依存欲求: $\chi^2=0.049$ $df=1$ n.s.) しかしながら、竹澤・小玉(2004)によれば性差をt検定で検討したところ、両スコアとも女子が男子よりも有意に高いという結果が示されている。今回の結果は、平均や標準偏差についてはそれらと近似した数値であったが、極端に平均から外れた値が多くみられたため平均に大きな差があっても χ^2 検定では有意差に至らなかったと考えられる。男子にはかなりの低得点者が、そして女子にはかなりの高得点者が数名いたことが平均の大きな差となって表れたのであろう。

対人依存欲求と相談行動の利益・コストとの関連

表2の結果より、まず女子において、情緒的依存欲求と「ポジティブな結果」に有意な相関

($r=.411$ $p<.05$)が認められた。情緒的依存とは、関連した研究の初期には「他者からの一般のあるいは抽象的で、心理的あるいは間接的な反応や行動により満たされる」心理的依存的要求(田中・高木, 1997)として述べられ、その後「他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得るという情緒的依存」(竹澤・小玉, 2004)としてまとめられている。一方「ポジティブな結果」であるが、いったん相談行動の利益・コストの下位尺度の分類を整理しておきたい。

つまり「ポジティブな結果」とは、相談すれば望ましい成果を期待できるということであるが、この背景には相談すれば相手に十分に応じてもらえるという相手に対する信頼感と、自分は相手に応じてもらえるだけの存在であるという自己評価あるいは自己信頼感があると考えられる。情緒的依存欲求の高さは、自己と相手への信頼感の高さと関連することが示されており(竹澤・小玉, 2004)、これらのことから、情

表1 対人依存欲求尺度, 相談行動の利益・コスト尺度改訂版, 学生相談機関イメージ尺度における各得点の平均と標準偏差

()内は項目数

【対人依存欲求尺度】(6ポイントスケール)						
	男子		女子		全体	
	M	SD	M	SD	M	SD
情緒的依存欲求(10)	34.3	9.44	39.2	8.79	37.2	9.36
道具的依存欲求(10)	41.9	8.34	43.2	9.39	42.6	9.01
【相談行動の利益・コスト尺度改訂版】(5ポイントスケール)						
	男子		女子		全体	
	M	SD	M	SD	M	SD
ポジティブな結果(8)	30.1	4.60	30.8	6.24	30.5	5.65
否定的応答(6)	13.2	2.89	14.6	4.11	14.1	3.74
秘密漏洩(3)	7.0	3.29	8.1	3.82	7.7	3.66
自己評価の低下(3)	8.9	3.50	7.7	3.17	8.2	3.35
問題の維持(3)	9.6	3.75	9.2	3.23	9.4	3.46
自助努力による充実感(3)	8.6	3.34	8.7	2.72	8.7	2.98
【学生相談機関イメージ尺度】(5ポイントスケール)						
	男子		女子		全体	
	M	SD	M	SD	M	SD
有益イメージ(14)	53.0	9.05	51.3	7.20	52.0	8.03
危機支援イメージ(13)	37.2	11.83	41.3	8.56	39.7	10.20
不利益イメージ(5)	7.8	2.66	10.1	3.17	9.2	3.17
不気味イメージ(4)	9.5	4.41	10.7	3.20	10.3	3.78

情緒的依存欲求の高い者は、相手から冷遇、拒絶される心配がないため、相談の結果として望ましい効果が得られることを予期し安心して相談することができるかと受けとめているものと推測される。

つぎに男子における情緒的依存欲求と「問題の維持」については10%水準の有意な関連が認められた。これは相談回避によるコストであり、相談しなかった場合に予期される不利益を

表す。情緒的に依存したい欲求を強く持ちながらも、相談の実行には消極逃避的であり、頼りたいが頼ることができず放置していても問題の解決には至らないで持続するだけであるという葛藤状態にあることが考えられる。男子では情緒的依存欲求と自己信頼感との有意な関連はないことが示されており(竹澤・小玉, 2004)、相談しなかった場合の不利益のみが意識されると解釈できる。

表2 情緒的依存欲求および道具的依存欲求と、相談行動の利益・コスト尺度改訂版、学生相談機関イメージ尺度それぞれの下位尺度との相関

【対人依存欲求尺度】	情緒的依存欲求			道具的依存欲求		
	男子 (n=22)	女子 (n=33)	全体 (n=55)	男子 (n=22)	女子 (n=33)	全体 (n=55)
【相談行動の利益・コスト尺度改訂版】						
ポジティブな結果	.031	.411*	.282*	-.062	.309 ⁺	.199
否定的応答	-.002	-.105	-.017	-.018	-.267	-.222
秘密漏洩	.165	-.101	.037	-.053	-.159	-.111
自己評価の低下	-.047	-.004	-.064	-.119	.273	-.219
問題の維持	.362 ⁺	.054	.169	-.056	-.084	-.077
自助努力による充実感	.067	-.076	-.007	-.070	-.365*	-.179
【学生相談機関イメージ尺度】						
有益イメージ	.144	.375*	.194	.153	.244	.194
危機支援イメージ	.206	.302 ⁺	.315*	.357	.282	.315*
不利益イメージ	.109	.031	-.033	-.087	-.049	-.033
不気味イメージ	.190	-.262	-.001	.278	-.247	-.001

⁺p < .10 * p < .05

表3 相談行動の利益・コスト尺度改訂版の下位尺度の分類と項目例

相談実行による利益・「ポジティブな結果」	(項目例)・相談すると、悩みの解決法がわかる ・相談すると、相手が励ましてくれる
相談実行によるコスト・「否定的応答」	(項目例)・相談しても馬鹿にされる ・相談をしても、相手に話を簡単に流される
「秘密漏洩」	(項目例)・相談したことを他の人にばらされる ・悩みを相談しても、それを秘密にしてもらえない
「自己評価の低下」	(項目例)・悩みを相談すると、自分の弱い面を相手に知られてしまう ・悩みを相談することは、自分の弱さを認めることになる
相談回避による利益・「自助努力による充実感」	(項目例)・一人で悩みに立ち向かうことで、強くなれると思う ・人に相談するよりも、自分でなんとかすることで、成長できる
相談回避によるコスト・「問題の維持」	(項目例)・一人で悩んでいても、いつまでも悩みをひきずることになる ・悩みを誰にも相談しないと、ずっと悩みから抜け出せないと思う

道具的依存欲求と相談行動の利益・コスト尺度改訂版との相関については、女子において、「ポジティブな結果」との間に10%水準の有意な傾向、そして「自助努力による充実感」との間では5%水準の有意差が認められた。道具的依存とは、「自分の要求が、他者からの個別的あるいは具体的で道具的あるいは直接的な反応や行動により満たされる」(田中・高木, 1997)、あるいは「自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めようとする道具的依存」(竹澤・小玉, 2004)として説明されている。女子においてはさきの情緒的依存欲求とともに道具的依存欲求においても「ポジティブな結果」と有意な関連が認められたことから、相談行動の結果の予期・期待が心理的次元でも具体的次元でも肯定的であることがわかった。女子は相談によって気持ちの上での安定が得られるばかりでなく、実際の問題の解決にも役立つと考えているようである。竹澤・小玉(2004)は、自己信頼感と他者信頼感に基づいた依存性は対人関係でより適応的なものとなり得ることを述べているが、相談の相手や結果を信じて気軽に相談行動をとれることは適応にとって有益であることは確かであろう。

さらに女子において道具的依存欲求と「自助努力による充実感」とには有意な負の相関($r = -.365$)が認められている。すなわち、道具的依存欲求の高い女子ほど、自らの力で問題や悩みを解決することに価値をおいていない、あるいは自らで解決することを望んでいないとい

うことである。相談することで満足な結果が期待できるのであればそれで十分であり、相談しないことで充実感を得ようとする必要などないと考えられているようである。

永井・新井(2008)により、相談行動の利益・コストに関する先行研究の紹介の中で、「一般的に援助要請行動は男性よりも女性の方が高い」「援助要請行動に対する態度も、男性よりも女性の方がポジティブである」ことが報告されている。今回の結果はこれらと一致するものである。

対人依存欲求と学生相談機関イメージとの関連

依存性と相談への態度をより具体的に調べる目的で、学生相談機関へのイメージとの関連について調査した。

まず学生相談機関イメージ尺度の4つの下位尺度について、項目の一部を示す。

男子においては有意な相関はみられなかった。女子においては、情緒的依存欲求と「有益イメージ」($r=.375$ $p<.05$) および「危機支援イメージ」($r=.302$ $p<.10$)との関連が認められた。「有益イメージ」は相談機関を利用することの効用を予期している点で「ポジティブな結果」と共通するところが大きいと考えられる。学生相談機関あるいはカウンセラーを信頼し、自分が相談した際には適切な扱いがなされるであろうと自己への価値・信頼を有していることによる結果であると解釈される。

表4 学生相談機関イメージ尺度の下位尺度ごとの項目例

有益イメージ(項目例)	・学生にとってありがたいところ ・悩みを解決してくれるところ
危機支援イメージ(項目例)	・精神的に弱い人が行くところ ・どうしようもなくなったら行くところ
不利益イメージ(項目例)	・お説教される場所 ・相談したことが外部にもれそうなところ
不気味イメージ(項目例)	・近寄りたがる場所 ・何をしているかよくわからないところ

「危機支援イメージ」は、まさに精神的苦境に陥ったときに頼ることのできる支援機関としてのイメージである。「有益イメージ」は軽度の悩みに対して気軽に利用できるというイメージであるが、「危機支援イメージ」はかなり重篤な精神状態の者が利用すべきところというイメージである。女子において有意傾向の関連が認められたことは、女子は軽度から重度まで幅広い精神問題について学生相談機関に情緒的依存することを肯定的に受けとめているといえる。

なお「不気味イメージ」については有意差には達していないが負の相関が得られ、けっして否定的なイメージは抱いていないようである。道具的依存欲求についても、有意差は認められなかったが、情緒的依存欲求と同じ傾向が「有益イメージ」「危機支援イメージ」「不気味イメージ」においてみられた。こうしたことから、女子の学生相談機関への依存は肯定的で抵抗感のないものである。

一方、男子の場合には特に相談機関に対する拒絶や嫌悪などマイナスのイメージはないが、プラスのイメージも強くない。自他への信頼感だけの問題なのか、あるいは男性特有の自尊心や自立心が原因なのか、今回の結果だけからは判断できない。

今回の研究において、大学生の依存欲求は相談および学生相談機関についてのポジティブなイメージと関連することが確認されたが、このことは女子に限定され、男子においては明確な関連は認められなかった。依存欲求と相談への肯定的イメージは、自己と他者に対する信頼感を基盤として成り立つものと考えられた。男子では依存や相談については男らしい自立・独立に反するものという社会通念が原因で関連性がみられなかったのかもしれないが、推測の域をでない。依存欲求については、性差、ジェンダーを十分に考慮した今後の研究が必要であろう。今回の研究はデータ数が十分でなく、分析方法もシンプルなものであるが、大学生の依存性と相談との関係を概観することはできたものと考

える。

参考文献

- 五十嵐哲也・大野恵利香・小澤夏美(2013)「中学生の担任と養護教諭に対する相談行動における利益・コスト」『愛知教育大学臨床総合センター紀要』4, 9-16ページ。
- 伊藤直樹(2006)「学生相談機関のイメージ及び周知度と来談意思の関係」『心理学研究』76, 6, 540-546ページ。
- 加藤 敏(2011)『現代精神医学事典』弘文堂。
- 加茂田智子・秋光恵子(2012)「中学生の教師に対する相談行動における利益とコスト ―生徒の期待と教師の予測の比較―」『学校教育学研究』24, 23-30ページ。
- 櫻井信也・有田モト子(1994)「SD法による学生相談センターに関するイメージの測定」『Student Counseling Journal』Vol.15, No.1, 10-17ページ。
- 繁榊算男(監訳)『APA心理学大辞典』培風館。
- 下山晴彦(2014)『誠信心理学辞典』誠信書房。
- 竹澤みどり・小玉正博(2004)「青年期後期における依存性の適応的観点からの検討」『教育心理学研究』52, 310-319ページ。
- 武田裕子・石田 弓(2013)「青年期における両親への相談行動について ―利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて―」『広島大学心理学研究』13, 191-209ページ。
- 永井 智・新井邦次郎(2007)「利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響」『教育心理学研究』, 55, 197-207ページ。
- 永井 智・新井邦次郎(2008)「相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成」『Tukuba Psychological Research 35』49-55ページ。
- 西河正行・鈴木典子(1994)「学生は学生相談室をどのように見ているか? ―短期大と専門学校の学生相談室調査を通して―」『慶應義塾大学学生相談室紀要』22/23ページ, 63-76ページ。
- 日本社会心理学会(編)(2009)『社会心理学事典』丸善。
- 荻原公世・吉川政夫・山田 實(1995)「学生相談のイメージとあり方 ―学生相談室に関する調査・中間報告―」『東海大学学生相談報告』28, 120-129ページ。
- 堀 洋道(監)(2011)『心理測定尺度集V 永井 智・新井邦次郎 相談行動の利益・コスト尺度改訂版』232-237ページ, サイエンス社。
- 堀 洋道(監)(2011)『心理測定尺度集V 竹澤みどり・小玉正博 対人欲求尺度』146-150ページ, サイエンス社。
- 堀 洋道(監)(2011)『心理測定尺度集VI 伊藤直樹 学生相談機関イメージ尺度』309-313ページ, サイ

Mar. 2015

大学生の依存と相談の心理

エンス社。

森田美弥子 (1997) 「学生相談室イメージと来談の関係
—大学生を対象にして—」『Journal of Japanese
Clinical Psychology』Vol.5, No.4, 406-415 ページ。
森田美弥子 (2003) 「青年期における「相談する」行

動の意味」『Bulletein of the Graduate School of
Education and Human Development.』50, 133-
140 ページ。

(2014年12月19日掲載決定)